「防災」を軸に全員参加のまちづくり。

「先進的な地域防災体制づくり」

～福住町町内会～ 事例07

防災活動はまさにまちづくり 住民一体の地域コミュニティへ

名簿・マニュアル作成から防災訓練まで。先進的な防災対策を実施。

先進的な防災対策で知られている福住町町内会。「平成15年の宮城県北部地震で一気に防災への意識が高まりました」と語る会長の菅原さん。

この地震を機に総合的な防災対策活動を開始。住民調査により1,000人の町内会会員名簿もすぐに完成しました。

「次に取り組んだのが、防災に関する総合的なマニュアルを作成し、町内会全世帯に配布することでした。」内容は、組織体制、災害調査表、連絡網、避難場所など完成度の高いものです。この防災マニュアルに沿って町内をあげて防火・防災訓練を毎年行っています。

町内あげての本格的な防災訓練。1年交代で5つの班をすべて経験。

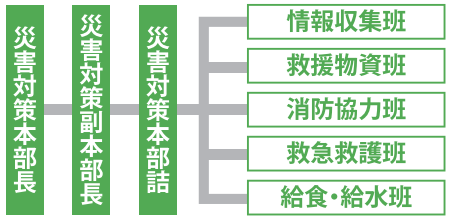
「災害時に必要なことを漏れなく行うために5班体制の組織を作りました。」

町内会長をトップとした災害対策本部の下に5班を設置。高齢者の安否確認、家屋の被害状況の把握、初期消火、負傷者の応急処置などを各班で分担して行うことにしています。

「災害時に重要なことは、住民一人ひとりが防災に必要なことの全体像をしっかり把握していることです。そのために町内会の会員全員が防災訓練に参加することを前提にし、会員全世帯に割り振りをして、1年交代で5年ですべての班を経験できるようにしています。」

5班体制による防災訓練の成果は、平成20年の岩手・宮城内陸地震でも活かされました。「地震発生後すぐに住民の安否確認を行い、区役所への被害状況の報告も訓練どおりにできましたね。」

■災害時の組織図



町内会の役員体制も充実 より多くの人が関わる中で 防災ネットワークを拡充

いろいろな工夫。より多くの人の参加を目指す。

「防災訓練への参加を促す工夫として、子どもたちが行ってみたいと思うような取り組みもしています。子どもを呼べば親御さんも一緒に来てくれます。お祭りと同じ感覚でやっています。」子どもが喜んで参加できるようにと、スタンプラリーを実施したり、企業にお願いして、福住町を上から眺めるための高所作業車を用意したり、参加証明書を配ったりと、様々な工夫をしています。

このように大々的な規模で訓練を行っている福住町町内会ですが、訓練自体は資材を持ち寄ったり、場所を提供して企業に災害対策用品などの展示をしてもらったりしているため経費はほとんどかかっていないようです。

初めから完成された訓練を行うことは難しいものです。「防災訓練はとにかくできることから始めることが必要です。事前にけが人や倒壊家屋などを決め、当日係の方がその情報を収集するというようなことは比較的始めやすいと思います。」

地域を巻き込んだ体制づくり。役員の人数は町内会世帯数の1割。

これだけの大規模な取り組みが円滑に行われている背景には、10人を超える副会長を含めて40人ほどの役員体制を敷いているということがあります。この数字は町内会の世帯数の1割に達するものです。

多くの方に役員を経験していただくことで、自主性と責任感が生まれ、様々な行事や活動がスムーズにできています。

なかなか若い人材を巻き込めない時代において、執行部内に若い方が多いのも特徴のひとつ。例えばPTAの役員をした方たちに婦人防火クラブの役員になっていただくなどの取り組みをしています。「自分から役員になりますという方はあまりいませんからね。PTAなどの活動をきっかけに、町内会の活動に入ってもらうというような道すじを作っていくことが大切です。」

こんな工夫もしています！

他町内会等との災害時協力協定 防災の輪が広がる

災害に強いまちづくりを目指して、他の地域と協力協定を結んでいます。万が一の時でも、他地域から物資やボランティアの提供を受けることができます。新潟県で発生した2度の地震でも緊急援助物資の提供を行いました。

事例のまとめ

- 全世帯参加の防災訓練を実施し、また、多くの方に役員を経験していただくなど、より多くの住民が参加する地域づくりを行っています。

ごみ対策を旗頭に町内会同士が連携。

「六七美化一揆連絡会」

～六郷・七郷地区～ 事例08

不法投棄という地域課題を周辺町内会との協力により解決

増加するごみの不法投棄。8町内会が立ち上がった。

「仙台東部道路ができた時期から、車・ベッド・電化製品などのごみが捨てられたり、野菜を盗まれたりということが増えました。町内でパトロールを行いましたが、とても間に合わなくなってきました」と当時の様子を語る六七美化一揆連絡会会長の大友さん。

何とかしなければいけないということで、仙台東インターチェンジから名取川堤防までの8つの町内会に声がけをしました。「区役所から連絡を取ってもらい集まってもらいました。地域の問題として皆が認識していたので、当初から各町内会長の理解は得られましたね。」

さっそく、8つの町内の想いがひとつになり、東部道路の東側の沿線を清掃する「六七美化一揆連絡会」が平成19年に発足。その年は約350名が参加、次の年は約460名に参加者が増え、取り組みは地域の住民全体に受け入れられています。

町内会を超えた連携へ。住民の意識も高くごみ70%減という効果も。

毎年9月中旬に行われる大清掃イベント。東部道路の側道約6㎞を4ブロックに分けて実施。8つの町内会が総出で行います。「清掃内容は、ごみ拾い、草刈り、泥上げなどです。1日で不燃ごみ2.7t、散乱ごみ1t、草類6.3t、土砂30tという膨大なごみが集まります。」さらに、大清掃イベントの当日だけでなく、日常的な取り組みもしています。昨年は監視カメラを取り付けたり、ごみを捨てないようにと書いた町内会の名前入りの横断幕を設置したりしています。

「このような地道な取り組みと年1回の大清掃イベントによって、全体でごみが70%減るという効果も出てきています。家庭ごみ有料化に伴って不法投棄が増えるのではと、さらにパトロールも強化しましたが、今のところ問題はないようです。」

住民主体の美化活動 地域のパワーを集約して まさに「一揆」といえる形で結実

広がる地域活動の輪。周囲からのサポートも拡大。

「六七美化一揆連絡会」は現在、六郷・七郷地区防犯協会、若林区中央幹部交番、東日本高速道路などの各関係機関も参加した大きな取り組みに発展しています。

「昨年、参加していない東部道路沿線の町内会から参加の申し出がありました。同様の課題を抱えた他地域にも影響を与えているのかも知れませんね。」

今年は企業の参加も予定。新聞等に取り上げられたことで企業側から問い合わせがありました。

さらに、地域での取り組みを知って、近所の運送会社も「地域にお世話になっているから」と日常的に草刈機で清掃活動をしています。地域住民の活動からネットワークがどんどん広がっています。

「これだけ大きな取り組みに発展すると、安易にごみを捨てることもできなくなっていますし、防犯効果も高まっていきます。地域活動もどんどん活発になるのではないでしょうか。」

住んでいる人の中から出てきた活動。だからこそ持続できる。

六七美化一揆連絡会立ち上げをきっかけに住民意識はさらに盛り上がっているようです。「名称の由来は、六郷・七郷にまたがる町内会による住民主体の自主的な美化活動を『一揆』に例えたものです。地域のパワーがいい連携を生んでいます。」

この地域の若い世代は、この土地に生まれ、農家の後継ぎとなる人が多いそうです。自分たちの町内の「美しい田園風景を守る」という意識も高く、参加も多いのが特徴です。

「地域の問題は地域の中から盛り上がらないとだめです。住んでいる人の中から出てきた活動だからこそ持続できると思いますね。」地域でしっかり取り組めばごみを捨てない習慣が身に付くなど子どもにもいい影響があるのではないでしょうか。

こんな工夫もしています！

美化活動から防犯活動へも広がっています

最近は不審者が多いので青色回転灯を町内会で用意し、学校の下校時間にパトロールを行っています。名取川で子どもたちが遊んだりするので河川のパトロールも行います。

事例のまとめ

- ごみの不法投棄という共通の地域課題を抱えた町内会が連携し、関係機関を巻き込みながら大規模な清掃活動などを行っています。

心に種をまく。人の輪が花開く。

「ふれあい交流花壇」
～土手内若葉町内会～ 事例09

不法投棄が続く荒れ地をみんなの手で「花壇」として再生！！

一年中季節の花に囲まれた町内。ふれあいのシンボルとなっています。

太白区にある土手内若葉町内会。町内5ケ所の公園に花壇が作られ、一年中いつでも季節の花に囲まれた光景が見られます。特に、町内の中央にある「ふれあい交流花壇」は、憩いの場所として、町内を明るく華やかにするふれあいのシンボルとなっています。

しかし、今でこそ想像もつきませんが、ふれあい交流花壇のある場所は、数年前までは粗大ごみの不法投棄に悩まされた「荒れ地」だったのです。

不法投棄が続いたこの場所を何とかしたい。町内のみんなが集まって相談した結果、「花壇」を作ろうということになりました。

ひとつひとつ地道な努力。みんなで力をあわせて荒れ地を再生。

「最初は大変でした。土が固くなっていたり雑草が生えていたり。こりゃだめだ、ということで、まずは、土壌づくりから始めたんです」と花壇施設幹事の佐藤さん。工事資材や砂利が置かれ、とても花づくりに適した土ではありませんでした。そこで、町内の墓石屋さんに機械を借り一緒に土を砕いたり、トラックで新しい土を運び入れたりと、まさに町内あげての土壌づくりから「ふれあい交流花壇」の取り組みが始まったのです。

花壇園芸委員を町内の回覧で募集。花が好きな人が集まり、10名が活動を開始。皆さん意欲的です。

一言で花壇づくりと言ってもやることは多種多様。育苗、枯花摘み、雑草取り、花種の選定、花苗の配置、花株の植え替えなどなど。また、ふれあいの場として利用できるようにと、日除け雨除けのできるふじ棚と手作りのガーデンテーブルやベンチを設置。花壇園芸委員が中心となって力を合わせて作業を進めました。作業は専門書を参考にしての試行錯誤ですが、みんなで一から作りあげる楽しさを感じています。

毎年数々の賞を受賞

平成20年度・夏花壇

花のあるまちコンクール（最優秀賞）

その他数々の賞を受賞しています。

一年中花が咲く町いつもみんなの笑顔が集う地域活動のシンボル

町の人々が集う風景。お年寄りが集まって井戸端会議も。

「ある日花壇を見に行くと、ベンチに座って中学生二人が仲良く勉強していたんです。花壇も定着してきたのかなと嬉しかったですね」と佐藤さん。

5年目を迎え、小学生からお年寄りまで、ふれあいの場所として定着してきました。芋煮会やバーベキューなどの町内のイベントにも利用。お年寄りが集っての井戸端会議など、最近見かけなくなった光景も目にします。

また、「ふれあい交流花壇に1時ね!」というように待ち合わせの場所にもなったりしています。

町を華やかにするこの場所今、町のシンボルとして花咲いています!

「毎年花壇のレイアウトを変更したり、春早く花芽のつく椿やさざんかを垣根に植え一年中花が咲いているように工夫をしたりしています。いつでもこの場所に来て欲しいですからね。」きれいな花壇を見に行くのを楽しみにしている人も多いとか。笑顔が集う場所があることで、町内全体の明るさにつながっています。また、花壇づくりに創意工夫を凝らすことで、花壇園芸委員の方々の意欲も高まっています。

さらに、花壇園芸委員の一生懸命やっている姿を見た近所の方から「うちで植えている草花でよかったら移植して!」と草花を提供してもらったり。「町内のみんなで花壇づくりをするんだ」という雰囲気が広がっています。

「ふれあい交流花壇」はこの5年間で町内の人たちの心に根を張り、今日も大きな花を咲かせています。

こんな工夫もしています！

委嘱状と感謝状で意欲を向上

花壇園芸委員の方には、町内会長名で委嘱状を出しています。また、4年間続けた方には、町内会から感謝状を贈呈。花壇園芸委員の方の意欲が高まり、地域社会のために貢献しているんだという実感が得られます。

事例のまとめ

- 粗大ごみの不法投棄に悩まされていた場所に花壇を造り、地域のふれあいの場として利用することで、地域課題が解決し住民間の交流も図られています。